

五島列島の潜伏キリシタン墓の研究 3*

(旧木の口墓所・遺物編)

野村俊之***・加藤久雄**・白濱聖子***

Study of the tomb of hidden Christians in the Goto Islands (3)

Toshiyuki NOMURA***、Hisao KATO**、Satoko SHIRAHAMA***

キーワード：潜伏キリシタン、五島列島、陶磁器

はじめに

著者らは五島列島で5年間、潜伏キリシタン墓地の基礎調査をおこない(久賀島キリスト教墓碑調査団 2007など)、10カ所以上の墓地を確認した。申請者らは、昨年度、地域総合研究所の補助のもと、関連情報量も多く、研究の進展上有望な旧木の口墓所で基礎調査として測量、ヒアリング、陶磁器の製作時期などを検討した。結果、旧大村領からの移住直後の18世紀末から19世紀初頭の典型的な潜伏キリシタン墓として、五島列島において、はじめて研究・報告することになった(加藤ほか(2014)：野村他(2014))。また三井楽教会所蔵の信仰具をデータとして取りまとめた(白濱他(2015))。また、全遺構の写真撮影を実施し情報を公開した(加藤他(2015))ほか、旧木の口墓所における「石組墓」の元型に対する予察を行った(野村他(2015))。これらの成果は、多角的なアプローチにより、潜伏キリシタン墓地の研究法の一つの典型的なモデルとして評価されている。これらの成果は本学地域総合研究所紀要上にて公表されたが、管理者の委託で研究している遺物は、一昨年の研究課題の下、1次整理を終えたものの、全点の実測は未着手であり早急なデータ化と研究にもとづく公開準備が求められていた。

本研究は、2013～2015年に実施した旧木の口墓所1・2次調査(加藤・野村ほか2014、2015：野村・加藤ほか2014：野村・加藤2014)に伴い、管理者である木口榮氏の墓地清掃の際に表面採取した遺物について、ピックアップを行い実測・詳細観察の結果を示すものである。

同時に出土遺物全点の撮影を行い、紙幅の関係上細片・接合遺物等を除いた大半の写真および、2015年の2次調査時に墓地管理者とともに新たに採取した遺物の観察表を掲載するものである。

遺物は18世紀末の移住期を中心に、第二次世界大戦前後を一つの画期として近現代に至る代表的なものを選択した。

なお、記述の便宜上遺構・遺物の用語を用いるが、改葬の進んだ現在も墓は、墓として機能し続けていることも明言しておきたい。

例言

研究企画・執筆：野村俊之・加藤久雄

観察表作成：美濃口雅朗氏(熊本市役所 熊本城調査研究センター)

実測図作成：井澤洋一氏(元福岡市教育委員会文化財整備課長(文化財専門職員)) 松園菜穂氏・鮎川和樹氏(別府大学考古学研究室) 白濱聖子・野村俊之(本学地域総合研究センター客員研究員)

実測図監修・トレース：井澤洋一氏

写真撮影：野村俊之

レイアウト：天本雅(石造遺産調査会)・野村俊之

遺物観察は実測図を基に遺物観察表を参考に執筆した。年代観については、九州近世陶磁器学会事務局編『九州陶磁の編年 九州近世陶磁器学会10周年記念』2000、器形特に茶碗類に関しては長佐古真也『続・お茶碗考—近・現代の中形碗に飯碗を探る—』「考古学が語る日本の近現代 [ものが語る歴史14]」2007を参照した。

遺物観察表の内、2013年度採取のものは『五島

* Received January 5, 2016

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 経済政策学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

*** 長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所客員研究員

列島の潜伏キリシタン墓研究 (旧木の口墓所)』(加藤・野村・白濱ほか2014)に記載しているため、紙幅の都合上割愛した。同文を参照されたい。

写真撮影は一眼レフデジタルカメラでLAW・JPEGデータとして保存した。

実測図はすべて1:1で行い、トレース図は縮尺3分の2で掲載した。

遺物・写真データ・実測図はインデックスを作成し、遺物及び実測図・データのコピーは墓地管理者である木口榮氏によって管理される。なお、原図及び写真データは本学にて保管する。

1. 遺物の観察

図版1・No.060 1820~1860年代の肥前系磁器染付端反碗破片である。高台部は欠落しており、復元口径11.2cm・残存部器高5.0cmを測る。外面の主文は欠けているが客蝶文が残存する、内面は口縁部に2条、下位近くに1条の圏線を描く。焼成は良好で胎土は乳白色を呈す。

図版2・No.069 18c末から19c中頃の肥前系磁器染付小坏破片である。復元口径7.3cm高台直径・3cm・器高3.5cmを測る、外面主文は上位に笹文、内面は無文。胎土は乳白色を呈し、高台下部は露胎で、目跡が残る。焼成は良好であるが、釉薬は溶けきってなく施文がやや白濁する。

図版3・No.214 19c後半の肥前系磁器染付端反碗1/4破片である。復元口径19.4cm・高台径4.4cm・器高6.0cmを測る。主文は欠落のため不明であり、内面は施文がない。高台は薄く畳付けは露胎で、内面に砂目が僅かに残る。焼成は甘く釉薬が溶けきっておらず気泡があり、外面には貫入が見られる。胎土は灰白色を示す。

図版4・No.078 No.079・134と接合する、18c後半から19c中頃の波佐見焼磁器染付碗の1/4破片である。復元口径10.2cm・高台径2.8cm・器高4.6cmを測る。外面主文は欠落のためはっきりしないが、雪輪草花文の可能性はある。外面下位に1条、高台に2条の圏線を施す。内面は無文である。高台内に「大明年製」崩れ文があり、高台は薄く畳付けは釉薬拭きとりで、内面に砂目が僅かに残る。焼成は良好で、胎土は灰白色を呈す。

図版5・No.095 No.094と接合する、1820~1860年代の肥前系褐釉時期小丸碗1/2破片である。強い水引きのため圏状の凹凸が目立つ。復元口径6.8cm・高台径3.6cm・器高4.5cmを測る。外面鉄釉・内面透明釉の掛分け、口縁部のみ草灰釉を施す。高台内は透明釉の掛けこぼしである、畳

付けは釉掻き取りで、細砂が付着する。焼成は良好で胎土は灰白色を呈す。

図版6・No.042 1820~1860年代の肥前系端反染付磁器染付小碗破片である。復元口径8.5cm・高台径3.2cm・器高4.5cmを測る。外面は一部欠けるが草花文、内面無文。やや厚く釉をかけ、高台内には釉溜りがある。畳付けは掻き取りである。焼成は良好なるも釉薬に焼きむらがある。また、内底に山側ハマ痕(現況では2箇所)が残る。胎土は灰白色を呈し、黒色微粒子を含む。

図版7・No.088 18c末から19c初頭の口縁部を欠く肥前系染付陶磁広東碗底部破片である。高台径は3cm・残存部器高2.0cmを測る。外面は下位及び高台、内面は下位に圏線各1条を描く、また内面底部には呉須絵はあるが文様は不明である。全面に透明釉をかけ畳付けは掻きとっている。焼成は良好で胎土は灰白色を呈す。

図版8・No.118 1800~1840年代の肥前系陶磁広東碗の底部1/4破片である。畳付け径5.9cm・残存部器高4.3cmを測る。内外面とも2本一組の網目文を施し、外面・内面下位に1条の圏線を施す。全体に透明釉を掛け、畳付けは掻きとっている。焼成は良好で、胎土は灰白色を呈す。

図版9・No.041 18c末から19c初頭の肥前系磁器染付碗の1/2片である。復元口径11cm・高台径4.3cm・器高5cmを測る。内外面とも透明釉を掛け、見込は蛇の目掻き取り、畳付けも掻きとっている。また、見込掻き取り面には目跡が残る。外面は熨斗文・松竹梅文を施しているがややにじむ、型紙刷りの可能性がある、また内面は無文である。焼成は良好で胎土は乳白色を呈す。

図版10・No.032 1820~1860年代の肥前系磁器染付端反碗底部1/4片である。復元口径11cm・高台径3.3cm・器高5.0cmを測る。外面はよろけ縞文、内底に格子文を施すほか、外面下位に1条・高台に2条・内面下位に1条の圏線を施す。全体に透明釉をドブ掛けし、外面高台基部はカイラギ状を示す、また内外面とも発泡する。焼成はやや悪く胎土は灰色を呈し、高台外部に付着物がある。

図版11・No.098 19c代の白磁小碗(猪口)1/2片である。復元口径6.4cm・高台径2.4cm・器高3.3cmを測る。全体にやや青みがかかった透明釉をかけ畳付けは掻きとっている、小鉄斑が見られる。畳付けに細砂が付着する。胎土は灰白色を呈す。

図版12・No.017 No.027bと接合する。19c末から20c中頃にかけての肥前系青磁平碗の1/3片であ

る。復元口径11.0cm・高台径4.0cm・器高5.6cmを測る。外面に3重の蓮弁を陽刻し、外面青磁釉、内面及び高台内透明釉を掛け分け、口鏝とする。高台内に「口山」銘を書く。焼成はやや良好で、胎土は乳白色を呈す。

図版13・No.040 19c末から20c前半の瀬戸美濃系陶磁染付小碗の下半1/2破片である。残存器高3.5cm・高台径3cmを測る。欠損のため主文は不明であるが、客文桐を型紙刷りで呉須及び酸化クロム・緑褐色で、外面下部に2条・高台に1条の圈線を施す。全体に透明釉を施し畳付けは削る。焼成は良好でややガラス質、胎土は乳白色を呈す。

図版14・No.110 18c末から19c中頃の肥前系磁器染付輪花皿破片である。高台復元径11.0cm・残存高2.2cmを測り本墓所採取遺物ではやや大型となる。内面に呉須で現況では草花文を描き、外面は下位に1条・高台に2条の圈線を施す他、わずかに呉須による描写を残している。全面に透明釉を施すが、拭き取りにより蛇の目凹型高台となる。焼成は良好で胎土は灰白色を呈す。

図版15・No.133 18c末から19c中頃の肥前系磁器染付皿の小片である。4cm×3cm程度残存し、法量は不明である。底部に草花文と思われる呉須染め付けを施す。蛇の目凹型高台の中心凹部及び内面には透明釉を掛ける。焼成は良好で、胎土は灰白色を呈す。

図版16・No.033 1820～1860年代の肥前系磁器染付端反碗の高台を欠く1/8片である。復元口径10cm・残存器高4.7cmを測る。外面に縦縞と雪持笹文、内面に簡略化した青海波文を持ち外面口縁下に1条・下位に3条・内面青海波上下に各1条・下位に1条の圈線を施す。焼成は良好で胎土は灰白色を呈する。

図版17・No.046 1820～1860年代の肥前系磁器染付端反碗の下部を欠く1/8片である。復元口径10.6cm・残存器高3.9cmを測る。外面は松文、内面口縁部には簡略された格子文を描き、外面口縁部下に1条の圈線を施す。全面に透明釉を掛ける。焼成は良好で胎土は灰白色を呈し、黒色微粒子を含む。

図版18・No.103 19c代の萩焼もしくは小石原焼系の藁灰釉陶器小坏で、下部を欠く1/8片である。復元口径6cm・残存器高2.5cmを測る。粗めの貫入の入る藁灰釉を掛け、胴部上半に鉄釉を置く。胴部下部は露胎である。焼成は良好で胎土は黄褐色を呈する。

図版19・No.132 18c代の京風関西系陶器坏の腰

部から高台部にかけての破片である。復元高台径3.1cm・残存高1.2cmを測る。貫入の目立つ透明釉を掛け、高台は露胎である。焼成は良好で胎土は褐灰色を呈す。

図版20・No.031 19c後半の肥前系磁器染付端反碗破片で底部を欠く。復元口径10.1cm・残存高3.9cmを測る。外面口縁は半花紋、体部は矢羽根状で先端に線描で十字架様の文様を付加する、内面口縁は瓔珞文。いずれも化学コバルト型紙刷りである。全体に透明釉をかける。焼成はやや甘く呉須が溶けきっていない、胎土は灰白色を呈する。

図版21・No.102 No.051・066・073と同一個体の、19c後半から20c初頭の肥前系磁器染付小坏で1/3を欠く。口径6.6cm・高台径2.8cm・器高4.3cmを測る。外面主文は松に唐子、内外面口縁には瓔珞文をめぐらせ、いずれも化学コバルト型紙刷りである。内面に酸化コバルトの小斑を認める。透明釉を全体にかけ、畳付けは削りにより露胎とする。焼成は良好で胎土は乳白色を呈す。

図版22・No.086 近代の関西系と思われる陶器急須もしくは土瓶口縁部から肩部にかけての破片である。復元口径は8.5cm・内径は7.0cm・残存高2.0cmを測る。弦用の耳部は粘土ヒモ貼り付け。黄白色の貫入が目立つ灰釉を全面に掛けるが、外部ではやや厚みがあり内面はきわめて薄い。また蓋受け部は釉を拭きとっている。焼成は良好で胎土は淡黄色を呈する。

図版23・No.036 19c後半の肥前系磁器染付端反碗破片で底部を欠く。復元口径10.5cm・残存高3.3cmを測る。外面の主文は不明であり、外面口縁下・胴部中位・内面口縁・下位にそれぞれ1条の圈線を化学コバルトで施す。焼成は良好で、胎土は灰色を呈す。

図版24・No.065 18c末から19c中頃の肥前系磁器染付丸碗で高台を欠く1/8片である。復元口径9.0cm・残存高3.3cmを測る。外面主文は不明であるが草花文の可能性があり、内面口縁に2条の圈線を巡らす。全面に釉を掛けるが溶けきってなく黄灰色を呈する。焼成はやや甘く胎土は灰色を呈する。

図版25・No.045 1820～1860年代の肥前系磁器染付端反碗の下部を欠く1/8片である。復元口径11.0cm・残存器高4.7cmを測る。外面は草文、内面口縁部には格子文を描き、内面下位に1条の圈線を施す。全面に透明釉を掛ける。焼成は良好で胎土は灰白色を呈する。

図版26・No.049 1820～1860年代の肥前系磁器染付端反碗の下部を小片である。復元口径10.0cm・残存器高3.8cmを測る。外面は草文とみられ、内面上部に上1条・下2条の圏線の中に組紐文を描く。全面に透明釉を掛けるが、焼成はやや甘く釉薬が溶けきっていない、胎土は灰色を呈する。

図版27・No.001 19c後半の肥前系磁器釉下彩の蛇の目凹型高台皿破片である。復元高台径9.0cm・残存器高2.0cmを測る、当墓所では比較的大型の皿である。内底面に松・鳥・月と雲紋を描き、輪郭線は黒で、濃みは化学コバルトの可能性が高い。外面は腰部から高台にかけて3条の圏線を施す。透明釉を掛けるが高台内面から蛇の目釉剥ぎを施す。焼成は良好で胎土は乳白色を呈する。

図版28・No.021 No.024と接合する、19cの腰部に稜をもつ肥前系磁器染付小杯(蕎麦猪口)の1/2片である。口径6.0cm・高台径2.8cm。器高4.3cmを測る。外面は雲水・遠山文を化学コバルトで描き内面は無文である。透明釉を全体にかけ、畳付けには細砂が付着する。焼成は良好で、胎土は乳白色を呈する。

図版29・No.089 No.067と接合する、近代の肥前系青磁小杯1/3片である。復元口径5.8cm・高台径2.5cm・器高3.5cmを測る。無文で全体に青磁釉をかけ、畳付けは削り露胎とする。内面に鉄小斑が見られる。焼成は良好で、胎土は灰色を呈する。

図版30・No.093 1820～1860年代の肥前系白磁染付端反碗と思われる底部1/3片である。復元高台径4.0cm・残存器高1.6cmを測る。外面は不明な呉須絵、内面は現状無文である。全面に貫入のある透明釉を厚く掛ける。焼成はやや甘く釉薬が溶けきっていない、胎土は灰黄色を呈する。

図版31・No.096 1820～1860年代の肥前系磁器小丸碗で高台体部上半を欠く1/4片である。復元高台径3.2cm・残存器高2.5cmを測る。現状で無文であり、内底に砂が付着する。焼成は甘く釉が溶けきれていない、胎土は灰色を呈する。

図版32・No.084 19c後半から20c初頭の肥前系磁器染付小杯の口縁を欠く1/2片である。高台径3.0cm・残存高2.6cmを測る。外面は化学コバルト型紙刷りの草花文から唐子文の一部が残る、内面は現況無文で、化学コバルトの小斑がある。全体に透明釉を掛ける。焼成は良好で胎土は灰白色を呈する。

図版33・No.038 19c後半の肥前系磁器染付端

反碗口縁1/8破片である。復元口径9.0cm・残存高2.5cmを測る。外面は内部に青海波を描くための弧線文及び梅花文、笹文、内面口縁は瓔珞文を化学コバルトの型紙刷りする他、外面口縁下に1条の圏線を描く。焼成は良好で胎土は灰白色を呈する。

図版34・No.056 1820～1860年代の波佐見焼磁器染付碗の口縁部小片である。残存器高3.7cmを測る。外面は二重網目文、内面は現状で無文である。全面に透明釉を掛ける。焼成はやや甘く胎土は灰色を呈する。

図版35・No.048 19c後半の肥前系磁器染付端反り碗口縁小片である。残存高3.3cmを測る。外面は振花状分割内部白抜きで蛸唐草、内面口縁は瓔珞文を化学コバルトの型紙刷りする。焼成は良好で胎土は灰色を呈する。

図版36・No.092 No.107・109は同一個体と考えられる、1820～1860年代の肥前系磁器染付端反り碗1/3片である。復元口径10.8cm・高台径4.3cm・器高6.0cmを測る。外面は丸窓蝶文の周囲に蔦草文を配し、口縁部に1条・腰部に2条・高台部に2条の剣閃を配する、丸窓は本来3箇所であったものと考えうる、内面口縁部はやや崩れた雷文である。全体に透明釉をかけ畳付けは釉剥ぎを施す。焼成は良好で胎土は灰白色を呈する。同墓所内採取の禁教期遺物としては優品であるといえよう。

図版37・No.043 1820～1860年代の波佐見焼磁器染付碗の1/3片である。器高10.0cm・高台径3.9cm・器高5.2cmを測り、やや歪である。外面雪輪草花文、内面は無文である。全面に透明釉を掛ける。焼成はやや甘く胎土は灰色を呈する。

図版38・No.062 No.063・064・091と接合する、18c後半の一部を欠く波佐見焼磁器染付碗である。口径10.5cm・高台復元径4.0cm・器高平均6.0cmを測るが、非常に歪である。外面雪輪草花文、高台に2条の圏線を施し、内面は無文である。透明釉をどぶ漬しており高台下部・畳付けには釉が回っていない。焼成はやや甘く胎土は黄灰色を呈する。本墓所採取の遺物では最古の部類に属する重要な遺物である。

図版39 No.050 No.070・209・215と接合する、20c前半の瀬戸美濃系と考えられる磁器小碗1/3片である。口縁径7.0cm・高台径2.4cm・器高4.2cmを測る。内外面口縁ともスプレー吹付けに依る化学コバルト濃みを施す。内面と外面上半には薄く透明釉を掛け、外面下半から高台は厚い鉄釉を掛

ける。この部分にはヘラ状工具で斜めに刻みを入れる。畳付けは露胎で、高台内部は工具ケズリを施す。焼成は良好で胎土はややガラス化した乳白色を呈し、微細な黒斑がみられる。

図版40・No.004 20c前半の肥前系磁器小杯の1/4片である。口縁径6.2cm・高台径2.4cm・器高3.7cmを測る。内外面とも化学コバルトをスプレーで吹き付けた半円形の濃みを施す。内外面に薄く透明釉を掛ける。畳付けは釉薬を拭き取る。焼成は良好で胎土は白色を呈し微細な黒斑を含む。

2. まとめと考察

総点数1次調査143点・2次調査22点(接合資料も含む)の内ガラス片1・動物遺体2(鳥骨1・貝類1)を除く164点の陶磁器片を採取した。

この内、鳥骨は自然死・もしくは野生動物の持ち込みが想定され、碍子1点も供献遺物とは考えにくい。ガラス片1は葬送または改葬儀礼に伴う残滓と見ることも可能であろう。このように採取遺物のすべてが葬送・供献・改葬儀礼に伴うものと見ることはできないが、ここではその大部分を墓所と何らかの関係があるものとして取扱う。

近現代の湯のみ・小杯など幾つかの例外を除いて遺物の殆どが破片資料であり、実測に耐えないものも多い。接合資料も少なからずあったが、復元完形に至らないものである。この様な状況から、故意の破碎廃棄・自然(意識されない人為も含む)破損と、破損後の雨水による流出が想定される。この問題については、今後出土位置と接合関係及び、個々の墓との関係の詳細分析を待って検討したい。

陶磁器は社会的状況から大きく4つの画期を想定した。1つ目は18世紀末から19世紀初頭の移住期、2番めは明治5(1872)年までの禁教期、次いで大きな社会変化のあった終戦までの近代、最後に終戦後から現在までの現代とした。これらは遺物の年代観でいうと、それぞれ、18世紀後半から19世紀中頃・1820~1860年代及び19世紀前半から中頃・19世紀後半から20世紀前半・20世紀後半に対応する。

移住期の遺物は11点を数える。図示したNo.041の肥前系磁器染付碗・No.064の波佐見磁器染付碗・No.069の波佐見焼磁器染付小杯・No.078波佐見焼磁器染付碗・No.088の肥前系陶磁染付小広東碗・No.110の肥前系磁器染付輪花皿・No.132の関西系陶器碗の他、一部関西系陶器や波佐見磁器染付、No.206の肥前木賊文碗の小片がある。

波佐見系が目立つのは後期潜伏キリシタンの故地である西彼杵半島が生産地と近いことがあげられる。特に、No.064の碗は器形の歪みが著しく、一般市場に流通するものとは考えにくい。生産地からの直接入手も視野にいれるべきであろう。この他早い段階で関西系陶磁器の流入が始まっていることにも注目したい。

19世紀に入ると、広く肥前系磁器染付が入るようになり、墓前に供される。

これらのことから、移住期遺物の中には移住以前に入手した身の回り品を墓前祭祀用に転用したものもあると考えられ、移住の時期と埋葬者の発生のタイムラグを考慮するならば、移住初期の潜伏キリシタンが造営を開始した墓所であることが理解できる。

近代遺物では、図版22 No.086の土瓶または関西系急須口縁部が注目される。あるいは胞衣容器のような用途の可能性もある(森山 2006)、長崎市外海地区の基礎調査に際して急須の供献例もあったことなどから、器形も含めてここでの判断は保留したい。

また、特に注目されるのは、19世紀後半に製作されたNo.031の肥前系磁器染付端反碗である。外面胴部に矢羽状施文が施されており、その頂部には花文の変形と見ることのできる十字様の輪郭描写がある。製作意図はどうかであれ、これを選択した供献者はこの文様に十字架のイメージを仮託したことは想像に難くない。

近・現代に入るとより広域な物流が発達し、瀬戸美濃系と考えられる遺物の流入も増加する、またNo.005や028のような完形品も増え、時間経過を破碎の原因とするだけではない、墓前祭祀の継続が行われたものとみられる。

上に挙げたNo.028・023は底部に「マルト陶器」の銘があり、このマルト陶器は現在も多治見市で操業していることが現代の流通の変化とその原因の一つとなる生産地の消長を知る上で、重要なものとなる。

この他No.028と023、128と213のように2点が対になった供献が行われており、祭祀に対する意識の変化が見て取れる。

おわりに

以上、清掃に伴う採集遺物実測調査の結果を報告したが、今後この成果をもって墓前祭祀のあり方と、個々の墓との位置関係を明らかにし、遺構と遺物を有機的に結びつけた遺跡論を進めていく

ことを表明して本稿の結びとしたい。

謝辞

本研究は、長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所2015B1および2014B3の補助を得て実施したものである。

調査及び採取遺物の貸与を快諾していただいた木口榮氏。実測・監修・トレースの委託をお願いした井澤洋一氏。観察表の作成をお願いした美濃口雅朗氏。研究上、さまざまなご協力を賜った別府大学考古学研究室の皆様。

記して感謝の意を表したい。

参考文献

九州近世陶磁器学会事務局編 『九州陶磁の編年 九州近世陶磁器学会10周年記念』 2000 九州近世陶磁器学会

森山栄一他『原田第1・2・40・41号墓所 下巻－原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告3－ 筑紫野市文化財調査報告書第9集』 2006 筑紫野市教育委員会

長佐古真也『続・お茶碗考－近・現代の中形碗に飯碗を探る－』「考古学が語る日本の近現代[ものが語る歴史14]」 2007 同成社

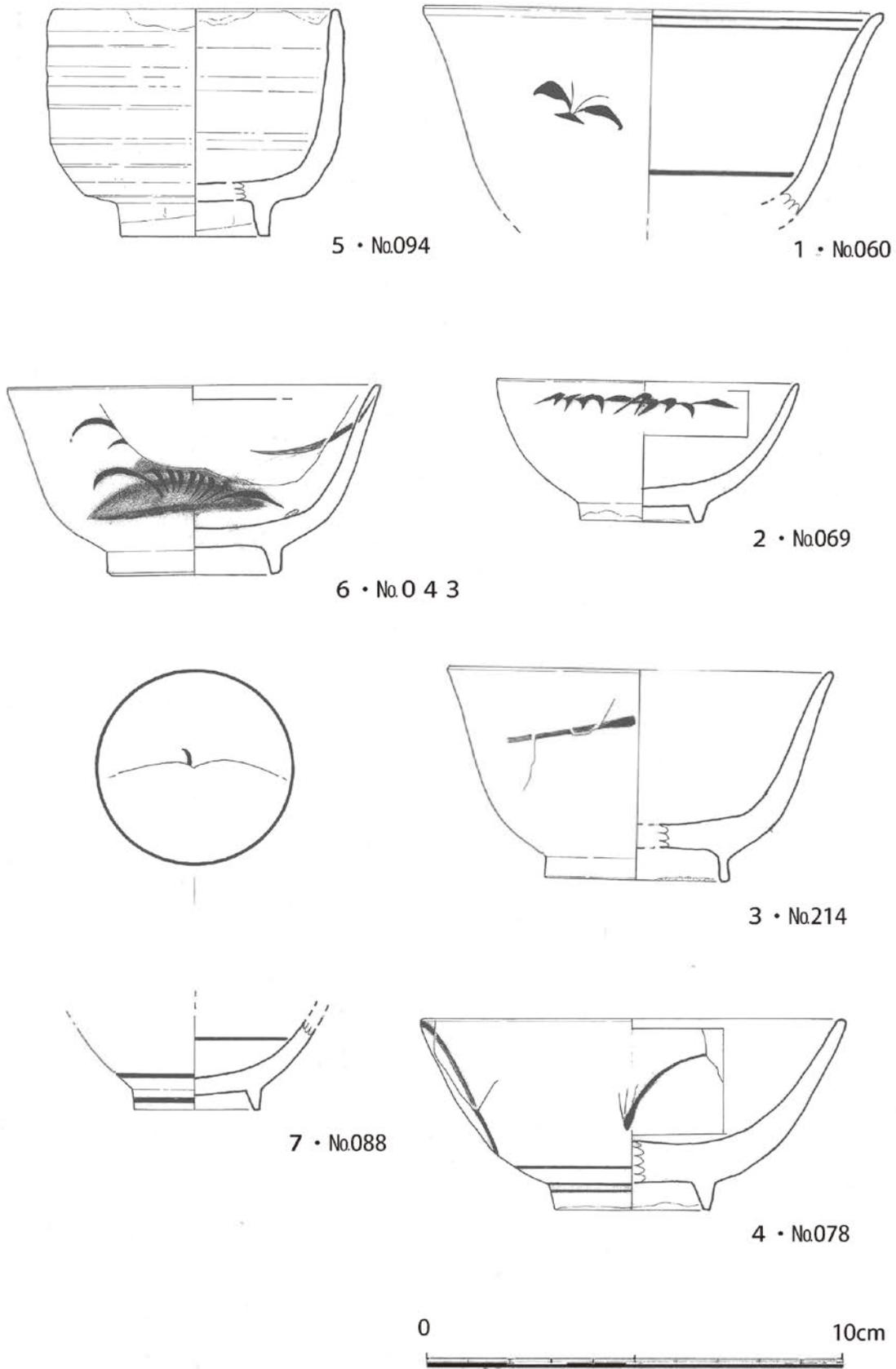
加藤久雄・野村俊之・白濱聖子・藤本新之介『五島列島の潜伏キリシタン墓の研究（旧木の口墓所調査）』「長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要12巻1号」 2014 長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要

野村俊之・加藤久雄・白濱聖子・藤本新之介『潜伏キリシタン墓の造墓原理』「長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要12巻1号」 2014 長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要

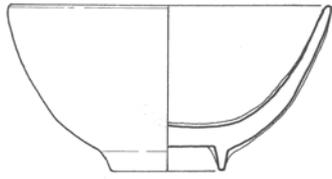
野村俊之・加藤久雄『潜伏キリシタン墓・木の口墓所の概要』「2014年次日本島嶼学会要旨集」(96－110) 日本島嶼学会

加藤久雄・野村俊之・白濱聖子・藤本新之介『五島列島の潜伏キリシタン墓の研究2（旧木の口墓所調査）』「長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要13巻1号」 2015 長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所

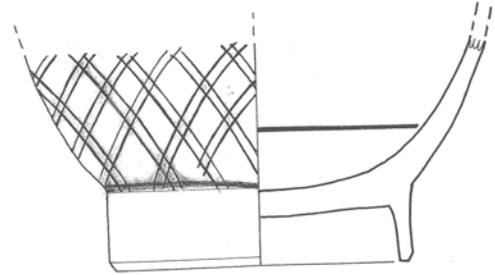
実測図 1



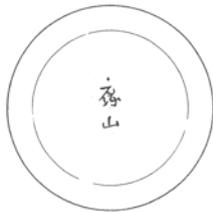
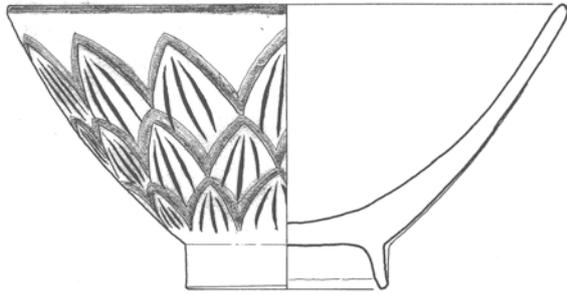
実測図2



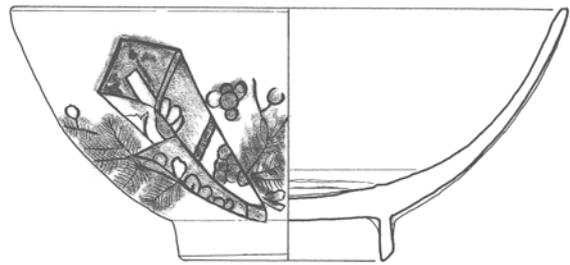
11・No.098



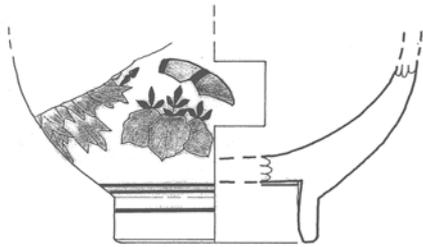
8・No.118



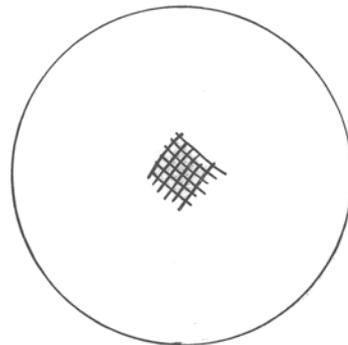
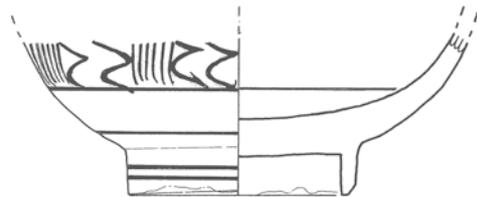
12・No.017



9・No.041



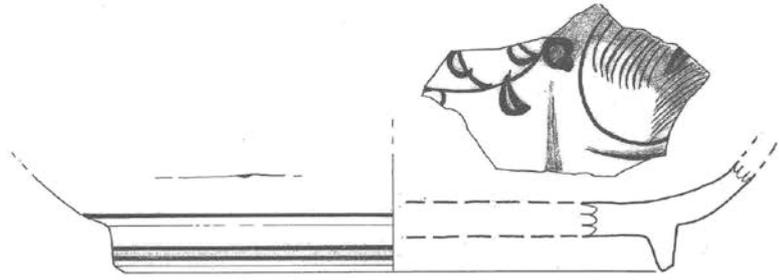
13・No.040



10・No.032



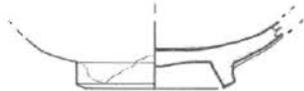
実測図3



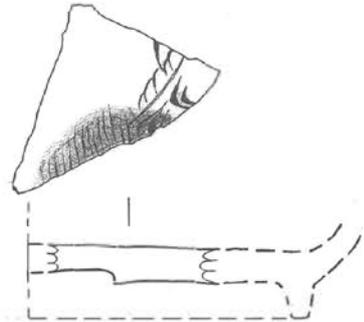
14・No.110



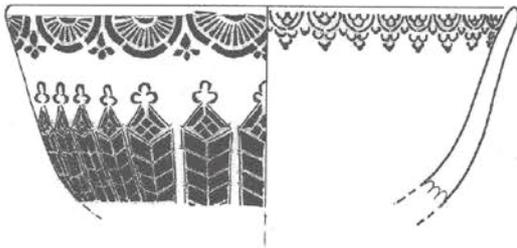
18・No.103



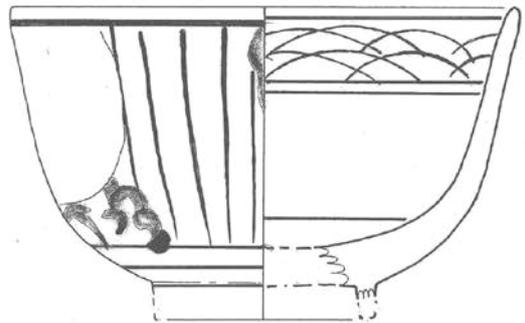
19・No.132



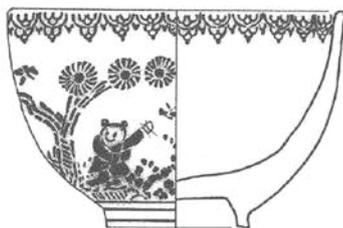
15・No.133



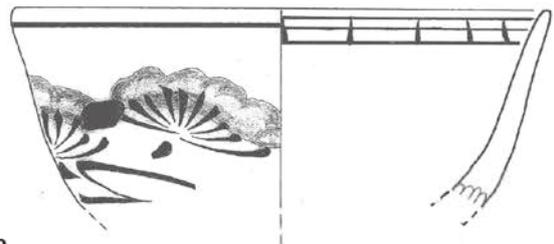
20・No.031



16・No.033



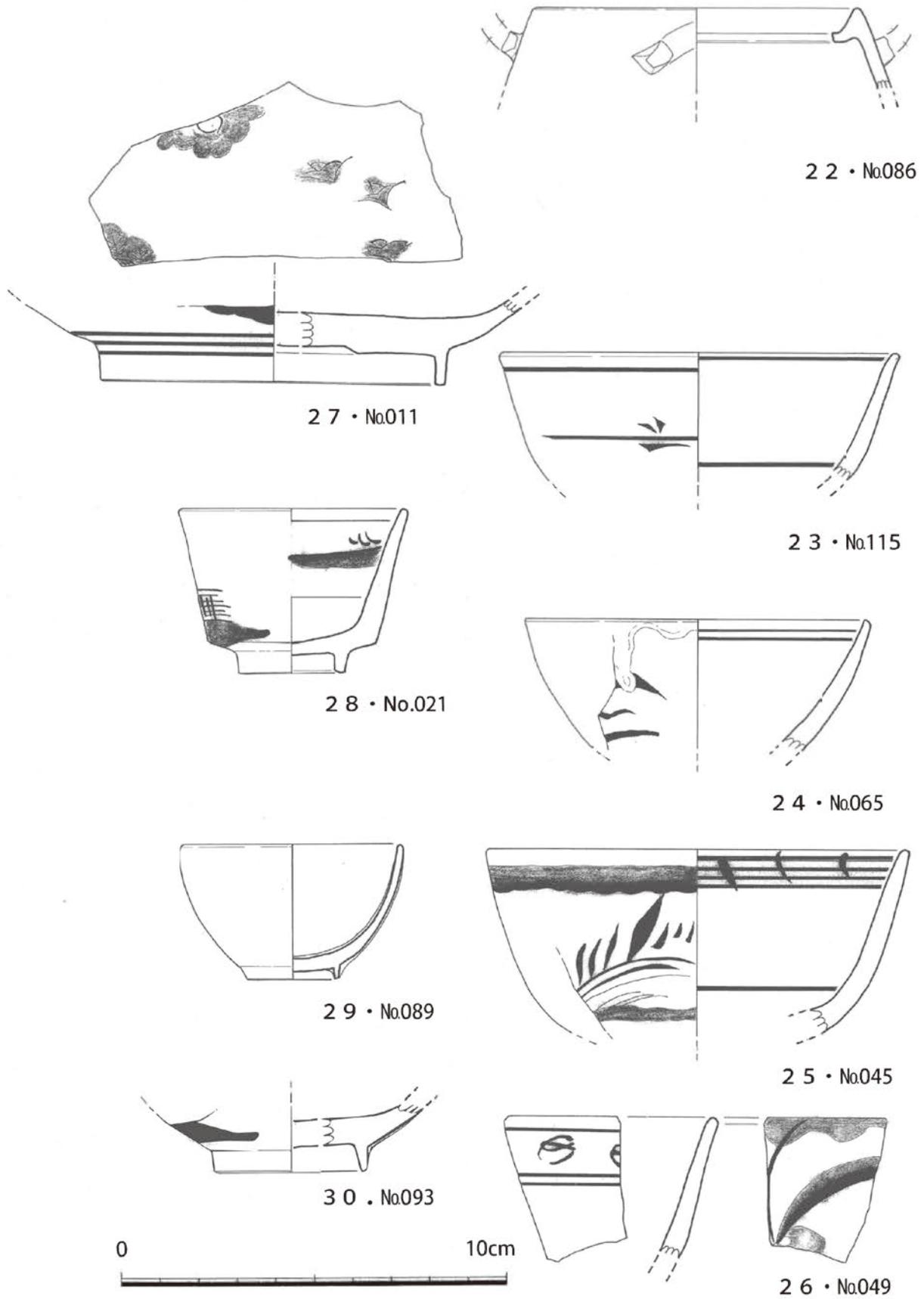
21・No.051



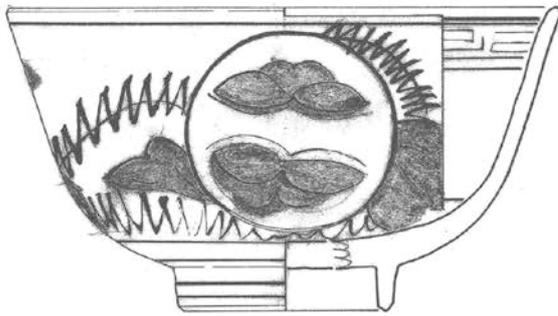
17・No.046



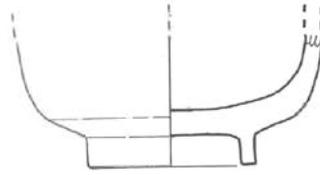
実測図 4



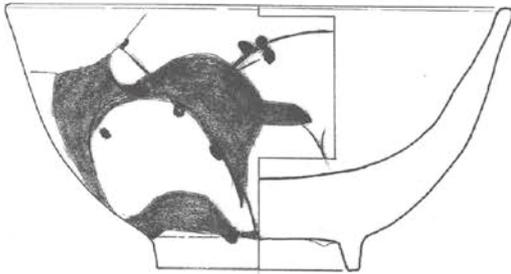
実測図 5



36・No.092



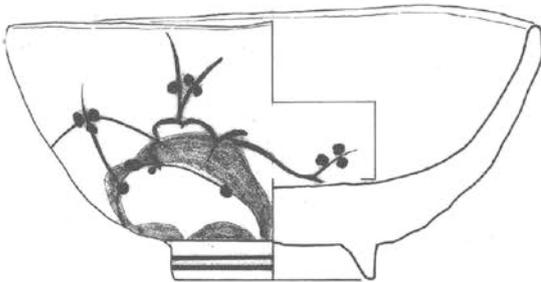
31・No.096



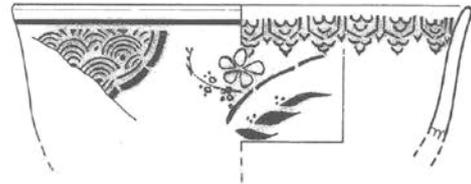
37・No.043



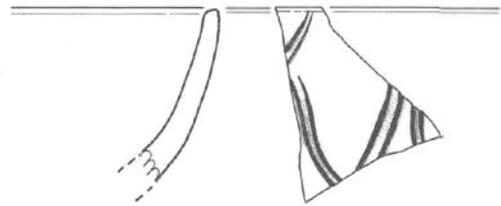
32・No.084



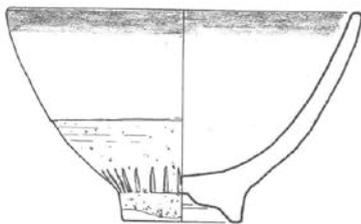
38・No.064



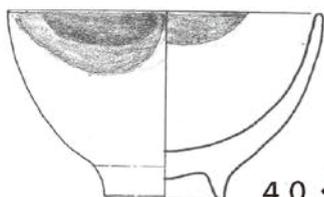
33・No.038



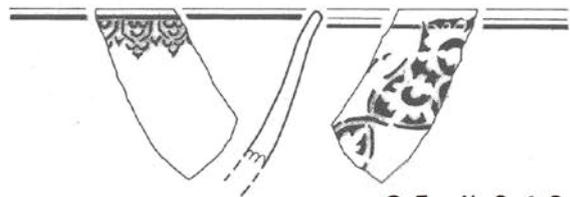
34・No.056



39・No.050



40・No.004



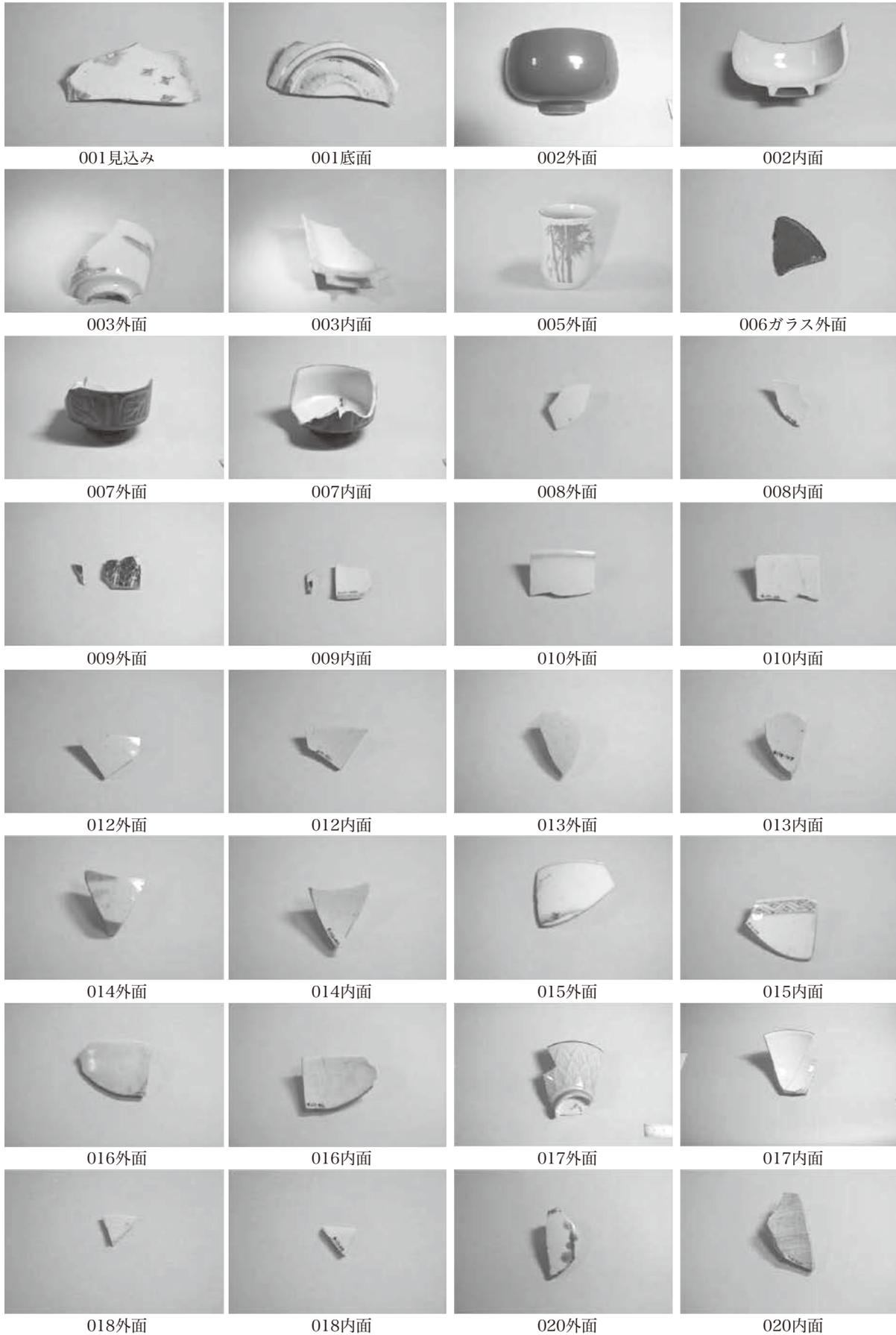
35・No.048



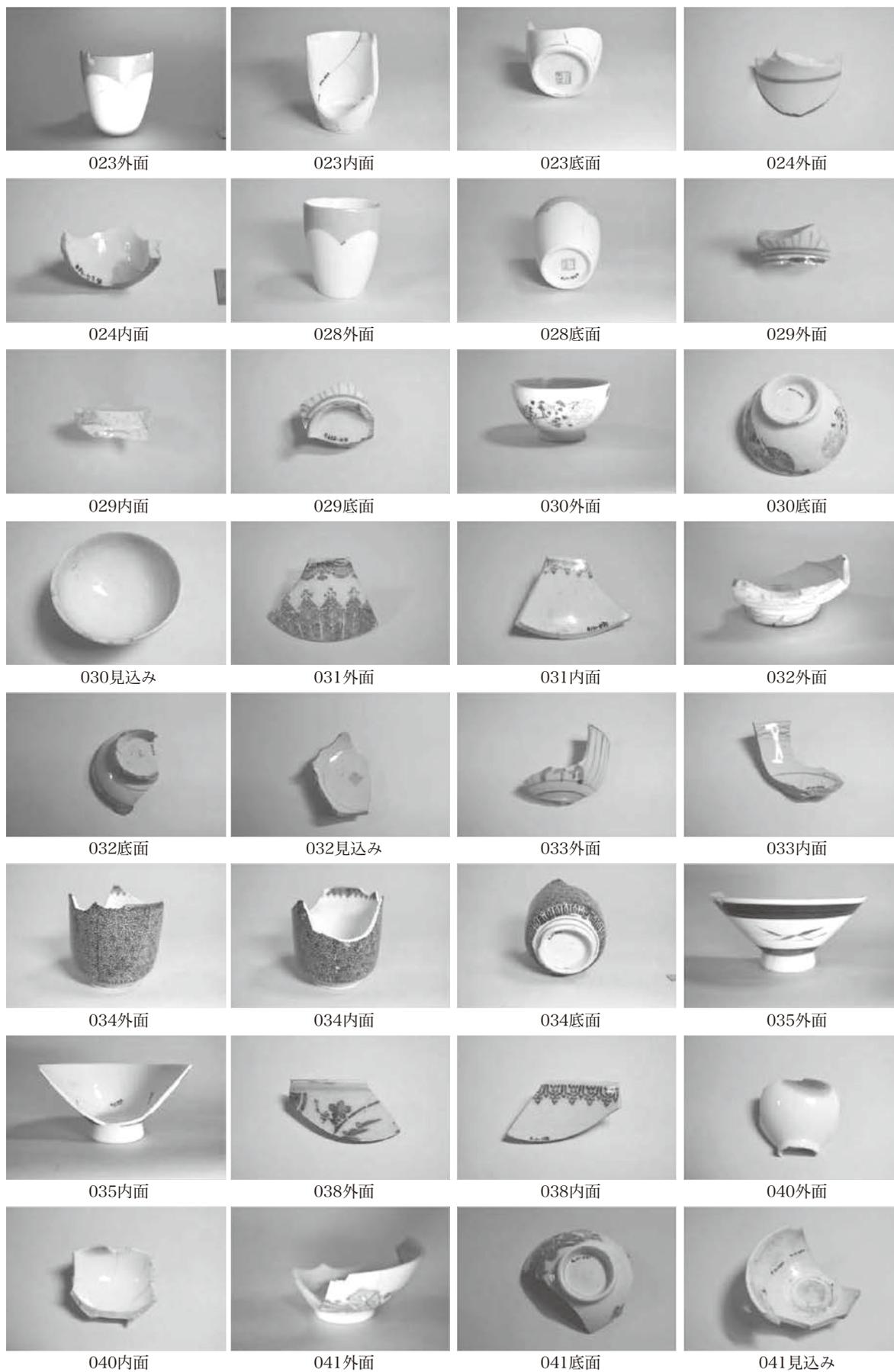
木の口2次遺物観察表

調査区	台帳No.	概要	焼成形態	器種	産地	年代	胎土	顔料	備考(文様ほか)
KNK2	201		磁器 供膳具				胎土 胎土ガラス質		備考(文様ほか) 現況文様無し
KNK2	202		磁器染付 端反碗?	肥前系 端反碗?	19初~中?				源氏香文、内面口縁部雷文
KNK2	203		磁器染付 小丸碗?	肥前系 小丸碗?	19初~中?				文様不明(種物)
KNK2	204		磁器染付 端反碗?	肥前系 端反碗?	19初~中				格子文、内面下位1条圓線
KNK2	205		磁器染付 端反碗?	肥前系 端反碗?	19初~中?				内面口縁部2条横線
KNK2	206		磁器染付 小広東碗?	肥前	18後半				木継文
KNK2	207		磁器染付 碗?	肥前系	1870以降? おそらく~20初				高台片、端反?
KNK2	208		磁器 碗?	肥前系?			やや黄ばむ、 微気泡あり		現況文様無し、口縁部は刻み? 内外口縁部吹き絵(エアスプレー)、外面体部下位鉄 粗
KNK2	209	同一個体2片	磁器染付 輪花碗		19末以降		胎土ガラス質	化学コバルト	
KNK2	210	欠番							
KNK2	211		磁器 皿?	肥前系					現況文様無し
KNK2	212		磁器染付 輪花碗	肥前系					文様不明(種物)
KNK2	213	209と同一片							
KNK2	214		磁器染付 端反小碗	肥前系	1870以降~20初			化学コバルト	文様不明、 表面・破面変色・釉表面に小さい瘡痕(明らかな二次 焼成ではない)
KNK2	215	209と同一片							
KNK2	216		磁器釉下彩 碗?		19末以降		胎土ガラス質	化学コバルト、暗黄土色	銅判転写、菊・丸文
KNK2	217		磁器 半球形碗?	肥前系	18後半~19初?				現況文様無し
KNK2	218		磁器染付 碗	肥前系	1870以降			化学コバルト	小片のため文様不明
KNK2	219		動物遺体 二枚貝	マガキ					風化著しい
KNK2	220	1	磁器釉下彩 湯呑碗		20c?			緑(酸化クロム)・白土	体部緑色の帯線、腰部鉄釉
KNK2	220	2	磁器染付 鉢or皿	肥前系	1870以降			化学コバルト	内面文様(不明)
KNK2	220	3	磁器 小坏?						高台片
KNK2	220	4	磁器染付 端反碗	肥前系	1870以降			化学コバルト	型紙摺り、花文、内面口縁部環状文

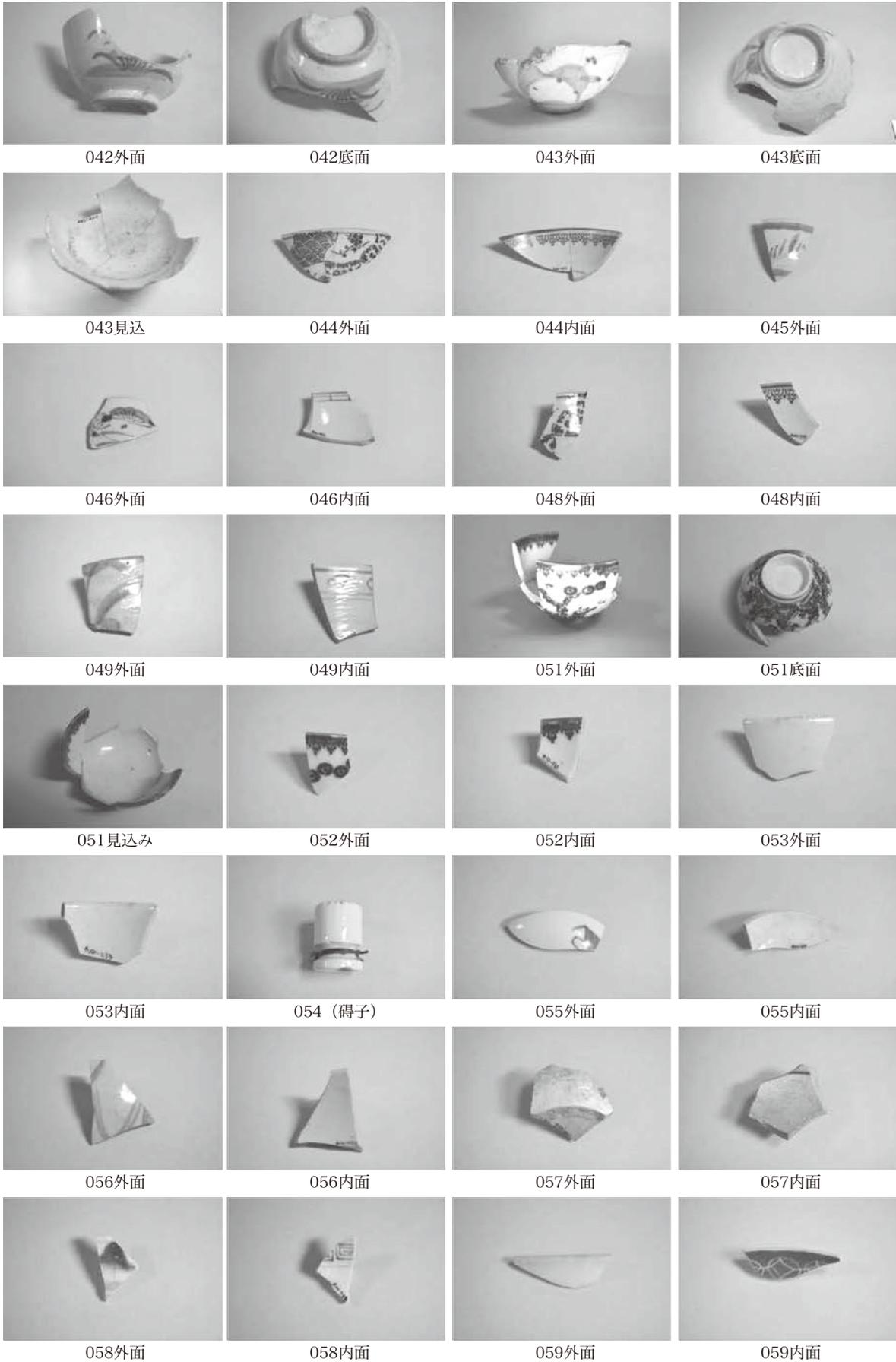
木の口 2次遺物図版 1



木の口 2次遺物図版2



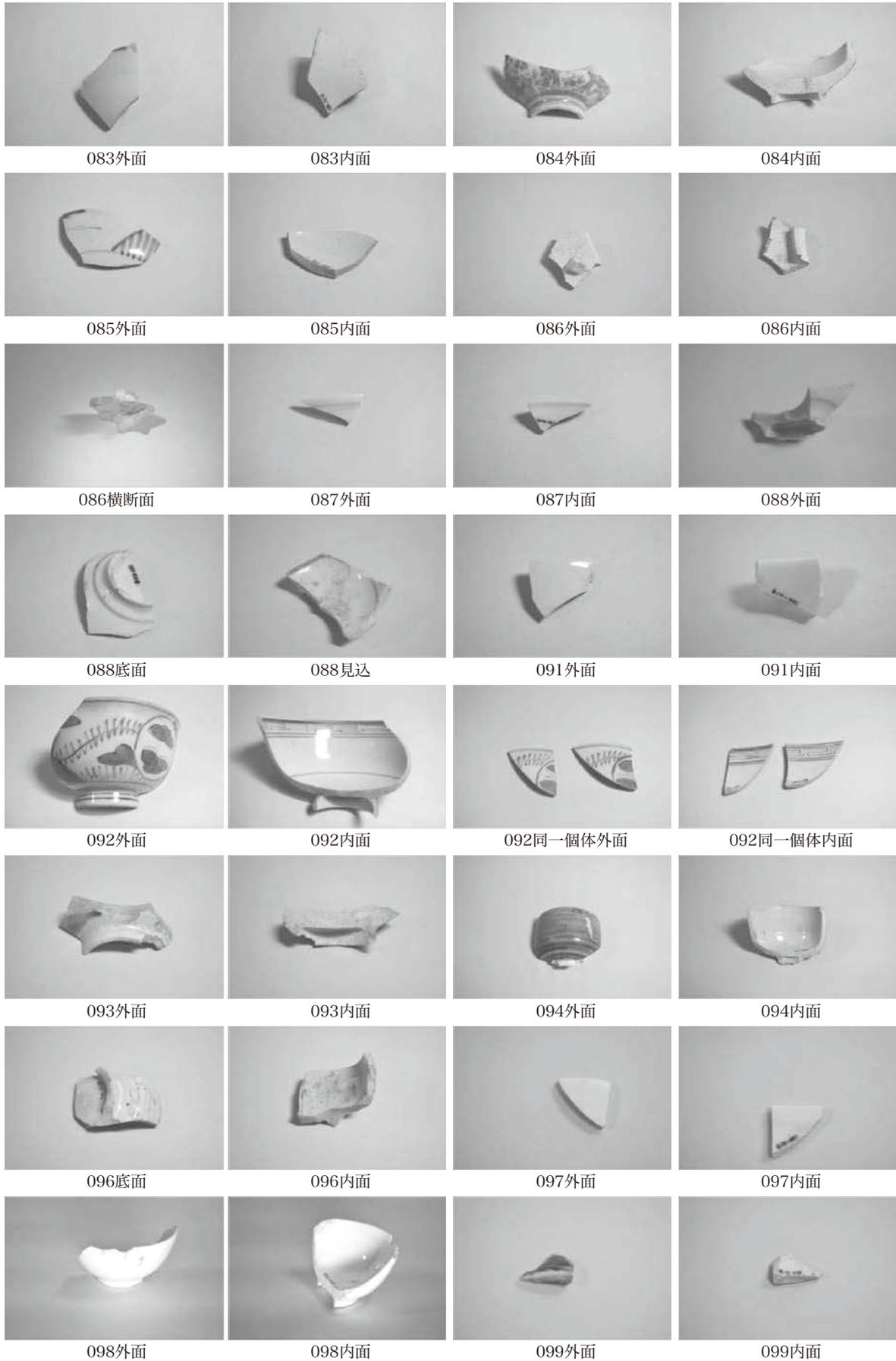
木の口 2次遺物図版 3



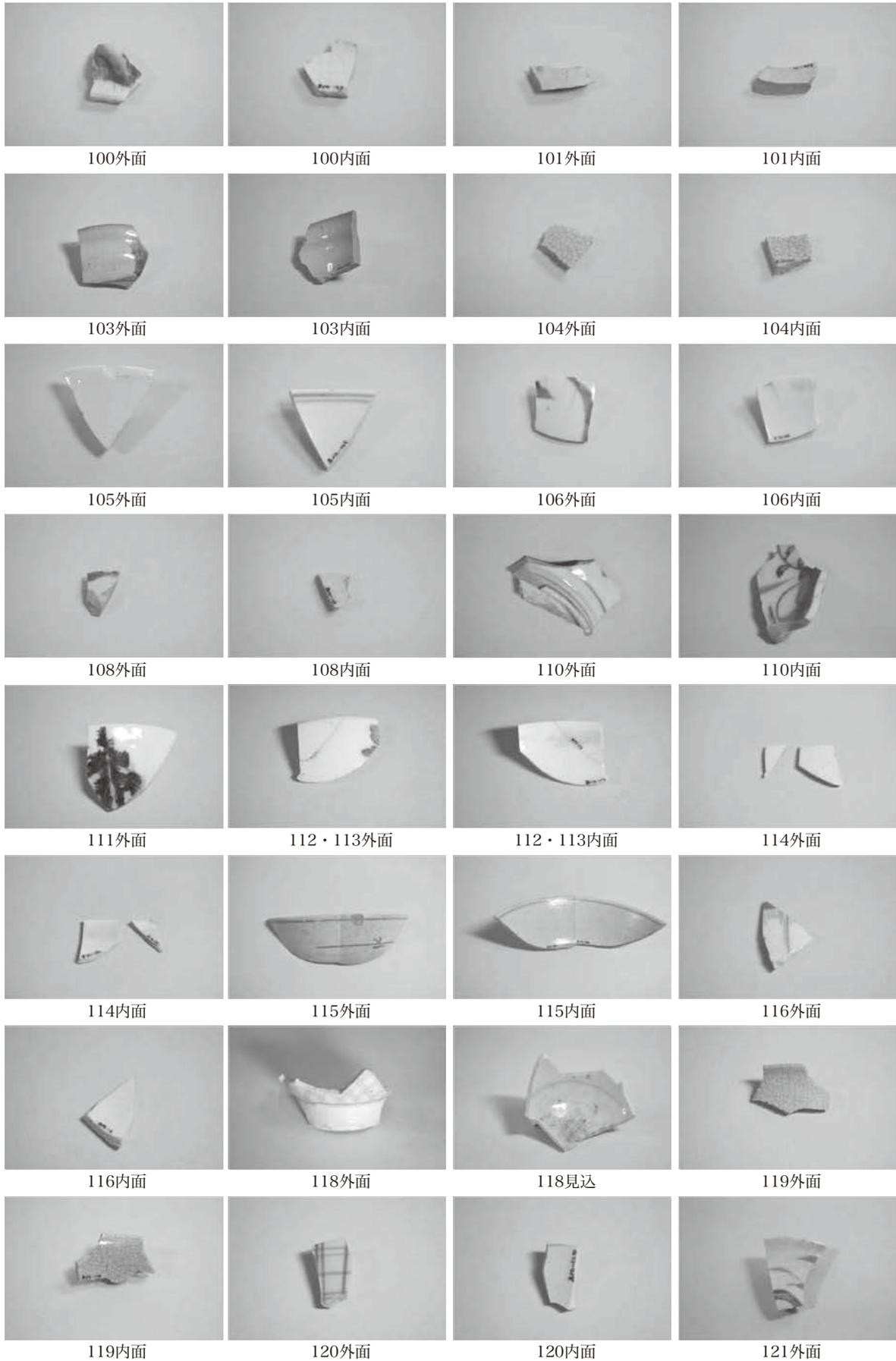
木の口 2次遺物図版 4



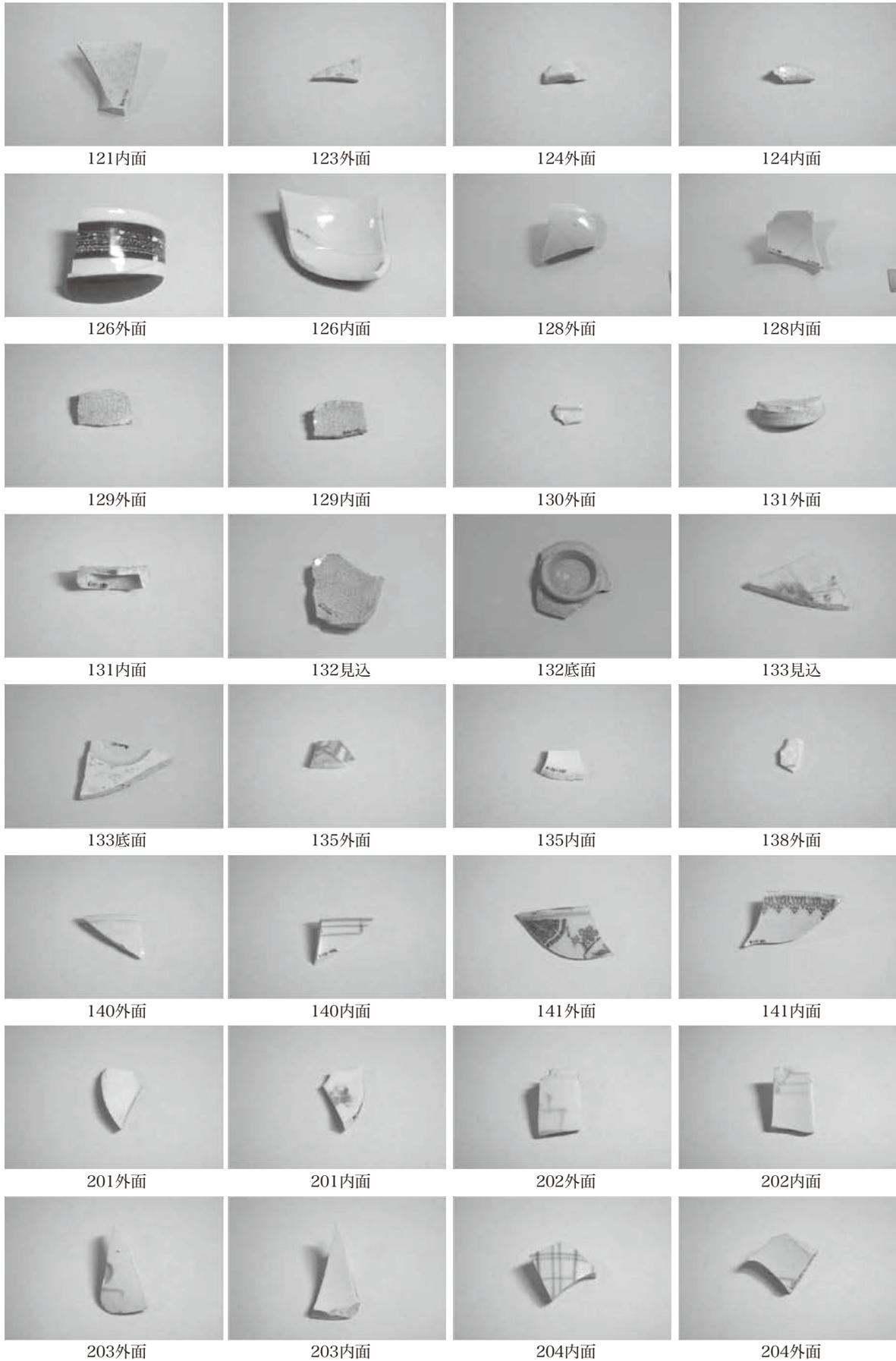
木の口2次遺物図版5



木の口2次遺物図版6



木の口 2次遺物図版 7



木の口2次遺物図版8

